



琉球大学資料館（風樹館）

風樹館だより



2009（平成21）年5月1日発行 第2号

はじめに

琉球大学資料館（風樹館）は、旧首里キャンパス時代に、県内企業の金城キク商会から建物の寄贈を受け、古農具類や動植物標本の展示を中心とした農学部附属の農業資料館（風樹館）として昭和42年に開館しました。当時、国内の大学にはまだ附属の博物館は少なく、日本の「ユニバーシティ・ミュージアム」の草分け的存在でした。その後、本学の千原キャンパスへの移転に伴い、昭和60年に全学共同利用施設として現在の資料館が新たに整備されました。当館には、おもに学内の研究活動によって琉球列島各地で収集された4万点余りの標本や資料が収蔵されており、特に琉球文化圏と亜熱帯地域という本学ならではの研究フィールドを背景としたユニークな学術資料が蓄積されています。

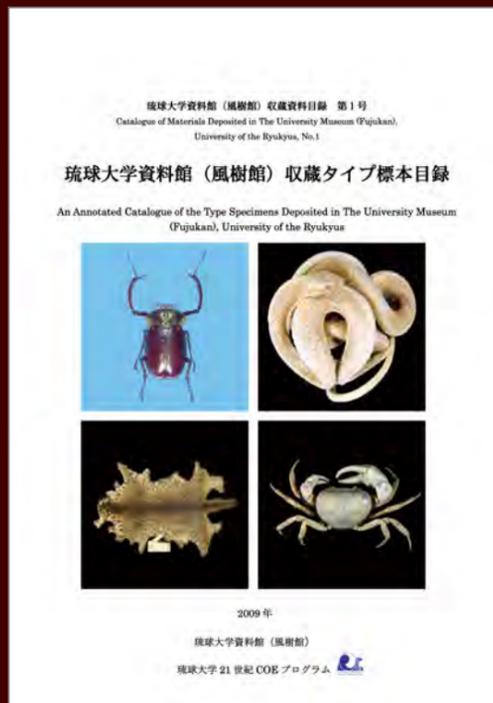
≪収蔵資料目録第1号発行！≫

風樹館収蔵資料目録第1号「タイプ標本目録」を発行しました。
2009年2月までに収蔵したタイプ標本83種2亜種268点が写真付きで掲載されています。また、当館ホームページでPDFファイルを公開しています。

＜収蔵資料のデータベース化と情報公開＞

当館では、従来の資料収集や保存といった研究的機能の整備に加え、大学が蓄積してきた様々な学術情報を広く社会へ還元するための社会的機能の付加にも力を注いできました。

先ず取り組んだのが、他の大学博物館でも整備が遅れていた収蔵資料のデータベース化とインターネットを利用した標本情報の公開です。これまでに全収蔵資料の約8割にあたる3万点余りの資料のデータベース化を完了し、平成17年度からは沖縄県内で初めてホームページ上からの標本データベースの検索を可能にした。また、平成18年度からは、「琉球列島を中心とした生物多様性に関する研究・教育拠点の形成」を目的とした本学中期計画実現推進プロジェクトおよび琉球大学21世紀COEプログラムの支援を受け、生物標本の中でも学術上極めて重要なタイプ標本のデータベース化を実施し標本情報をHPで公開するとともに、昨年度は「琉球大学資料館（風樹館）所蔵のタイプ標本目録」を刊行しました。今後も、各分野の標本・資料の目録を順次発行していく予定です。



目次

- 01： はじめに
 - 収蔵資料目録第1号発行!
 - 収蔵資料のデータベース化と情報公開
- 02： 琉球列島の固有昆虫
- 03： 新収蔵資料
 - 風樹館コレクション NO.2
イリオモテヤマネコ
- 04： 2008（平成20）年度
来観者数
 - 2009（平成21）年度
行事予定
 - 2009（平成21）年度
運営体制
 - 利用案内



琉球列島の固有昆虫

琉球列島は、九州の南端から台湾にいたる約 1200 km の間に連なる 100 以上の島からなる。これらの島々は、その大きさや標高、地質、気候、島の成り立ちなどに様々な違いを持ち、それぞれの島で微妙に異なる独自の自然環境をつくりだしている。琉球列島の島々では、島という隔離された条件に加え、こうした地史や自然環境の多様性により、昆虫類をはじめ多くの生物が島に固有の進化を遂げてきた。

□ 島の固有昆虫

ある生物が、特定の限られた範囲にだけ分布する場合を固有といい、日本固有とか沖縄島固有などという。琉球列島の昆虫相を特徴づける要因の一つに、この固有種の多さがあげられる。現在、沖縄県内から約 4750 種の昆虫類が記録されているが、その内 24% が固有種（亜種も含む）である。なかにはホタル類のように、ほとんどの種が島ごとに固有種となっているものがある。琉球列島には、なぜこのように多くの固有種が存在するのだろうか。

一口に固有といっても、その生物が固有となる過程の違いにより、新固有と遺存固有（古固有）とに分けられる。新固有とは、もともと広い範囲に生息していた同じ種類の生物が、地理的にいくつかの集団に隔離され、時間の経過とともにそれぞれの集団が遺伝的に分化して新しい種や亜種になったものである。このため、新固有の生物では、周辺地域に祖先を同じくする近縁種が分布する場合が多い。例えば、リュウキュウノコギリクワガタは、近接する島々で大顎の形や体色が少しずつ異なり、6 種類もの亜種に分化している。

一方、初めは広く分布していた種が、環境の変化や他種との競合などによって分布が縮小され、特定の地域にだけ取り残される場合がある。このような生物を、遺存固有という。ヤンバルテナガコガネは、世界でも沖縄島にだけ生息し、周辺の島々にも近縁種はいないため、この遺存固有種にあたる。

小笠原諸島のように、一度も大陸とつながったことのない海洋島の固有種は全て新固有の生物であるが、琉球列島のように、過去に大陸と陸続きであった大陸島では、これら両方の固有生物が見られる。また、琉球列島は、大陸から分離した後も、いくどか大陸や台湾と陸橋でつながったり離れたりを繰り返しており、その時々にも様々な昆虫類が陸橋を渡り分布を広げてきた。このようなことから、琉球列島では複雑な分布パターンを持つ非常に多くの固有昆虫が存在するのである。

□ 島に護られてきた昆虫（遺存固有の昆虫）

かつてアジア大陸の一部であった琉球列島では、大陸から分布を広げてきた昆虫の一部が、何らかの理由で周りの種が絶滅した後も、島という天敵や競争者の少ない隔離された環境に護られ遺存種として生き残ってきた。これらの種は、琉球列島の昆虫相の調査がまだ不完全であることと、個体数が少なく非常に限られた場所に生息することが多いため、ヤンバルテナガコガネやクメジマボタルのように最近になってようやく発見された種類もある。また、遺存種は、琉球列島の地史や種の系統進化を解明する上でも貴重な昆虫類である。ここでは、琉球列島の代表的な 3 種の遺存種を紹介する。

【ヤンバルテナガコガネ】

1983 年に発見された沖縄島の固有種で、通称、山原（ヤンバル）と呼ばれる沖縄島北部の自然林にだけ生息する。本種の存在については、以前に前翅の一部が見つかっておりその生息が確認されていたが、樹洞という特殊な環境に生息するため、長い間採集されることはなかった。ヤンバルテナガコガネの発見以来、多くの昆虫愛好家が奄美諸島や八重山諸島でテナガコガネの探索を行ったが、山原以外では発見されていない。幼虫は、イタジイなどの幹に開いた樹洞の中で腐植を食べて成長し、雌成虫は羽化した後も樹洞から出ることはほとんどない。系統的には、地理的に最も近い台湾のタイワンテナガコガネよりも、中国大陸に分布するキベリテナガコガネに近縁であるといわれている。



【クメジマボタル】

1993 年に発見された久米島の固有種で、幼虫期を水中で過ごす日本で 3 種目の水生ボタルである。本種は、ゲンジボタルと近縁であるが、生態的にはいくつかの異なる点が見られる。ゲンジボタルでは、発光パターンや産卵行動に西日本と東日本の集団で明瞭な違いがある。クメジマボタルは、この両方の特徴を合わせ持つことから、東南アジアから中国大陸にかけて分布していたゲンジボタルの祖先種が、南から北へと分布を広げる過程で久米島だけに取り残された遺存種であると考えられている。



【アサヒナキマダラセセリ】

石垣島と西表島の固有種で、食草のリュウキュウチクが生えている山頂付近に局所的に生息する。このチョウの仲間は、世界で13種類が知られており、本種以外は中国大陸西部からヒマラヤにかけての寒い地域に分布する。南方系のチョウ類が多い琉球列島では、一年で数世代を繰り返す多化性の種が多い中、本種は、年に1回しか発生しない。5月に羽化した成虫は、わずか2～3週間の短い発生期の後、幼虫で越冬し翌年の4月に蛹になる。このような生活史を持つチョウは寒冷地に多く、琉球列島では本種だけである。このような特徴から、アサヒナキマダラセセリは、琉球列島が大陸と陸続きとなった氷河期に、寒冷な気候であった琉球列島周辺に分布を広げていた祖先種が、氷期の終了とともに比較的標高の高い地域に取り残された種であると考えられている。

□ 壊れやすい島の自然

島は進化の舞台であると同時に、絶滅の舞台でもある。もともと島で固有化した生物は、大陸などにくらべ生息範囲が狭く個体数も少ない。このため、一つの生息場所が壊されるだけで、直ちに一つの種の絶滅につながる場合も少なくない。多様な自然環境を持つ琉球列島の島々ではあるが、それぞれの自然環境は規模が小さく、海岸からすぐさま山にいたる狭い範囲に凝縮されている。ヤンバルテナガコガネなどの多くの固有種がひしめき合っている沖縄島の山原にしても、その面積は以外に狭い。西海岸と東海岸の幅は広い部分でも直線にしてわずか12kmほどしかなく、また、この中でまとまった森林が残されているのも、島の北端から25kmほどの範囲でしかない。生き物たちは、その中にモザイク状に散らばるそれぞれの種に適した生息環境に、小さな集団で存在している。このような生息環境は、周囲の植生や地形、水系などの微妙なバランスの上に成り立っており、わずかに周囲の木が切られ微気象が変わっただけでも簡単に壊れてしまう。

今、琉球列島の島々は、どの島もほとんど例外なく開発によるすさまじい自然破壊が進行している。これまで島に護られ生きてきた生き物たちに、これからも進化の機会を与え多様な生物相を維持していくためには、この壊れやすい島の自然環境をいかに保護していくかが大きな課題である。

(佐々木健志)

新収蔵資料

昨年度は、稲嶺盛吉氏の琉球ガラスや、人間国宝の金城次郎氏の作品を収蔵しました。また、八重山ミンサー工芸館より、八重山交布（グンボー）や八重山ミンサーの織り見本、八重山上布の文様見本を寄贈いただきました。



泡二筆花器壺（稲嶺盛吉作）



八重山ミンサー織り



八重山交布（グンボー）織り



魚紋抱瓶（金城次郎作）



八重山上布文様見本

◇ 風樹館コレクション No.2 【イリオモテヤマネコ】

※当館には、生物に学名を与える（種の記載）際に用いられたタイプ標本や学術上重要な資料が多数収蔵されています。

本標本は、親富祖氏がイノシシ罾に掛かって死んだ個体を猟師から譲り受け、腐敗を防ぐため自宅で毛皮を剥いだ後、高良博士に送ったものである。これによりイリオモテヤマネコの存在が確実となり、新種記載に向けての本格的な研究が開始された。この毛皮は脚や尾の一部が欠損しているが、親富祖氏の話によると薄暗い中で切れない包丁を使って毛皮を剥いだため、きれいに剥ぎ取れなかったそうである。このため、本標本は新種記載の際に完模式標本とはならず、副模式標本として利用された。



初めて収集されたイリオモテヤマネコ成獣の毛皮標本

2008（平成 20）年度入館者数

2008（平成 20）年度入館者総数は、1,191 人でした。内訳は、学内学生 295 人、県内学生 566 人、県内一般 242 人、県外学生 16 人、県外一般 72 人です。県内学生については小学校等の社会科見学や総合学習、理科の授業等の団体利用が増えています。

※ ただし、入館無料のため来観名簿への記入者が少なく、実際の入館者数はさらに多いと思われます。また、昨年度は館内改修工事のため、夏季期間中は休館していたため、これまでより来観者数は減少した。

2009（平成 21）年度行事予定

◇ 企画展等の開催

- ・ ようこそ大学博物館へ～実物標本で見る沖縄の自然と文化～ in 那覇空港

（平成 22 年 2 月 16 日から 26 日 / 那覇空港 2 階ホール）

琉球大学資料館初の試みとして、沖縄を訪れた方々や県民の皆様に見ていただくために、当館が所蔵する貴重な実物標本の中から、沖縄の自然と文化を代表する生物標本や民俗資料の一部を選んで展示します。

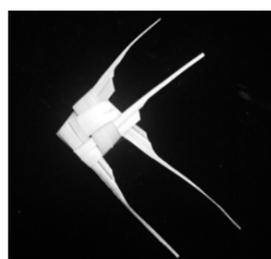
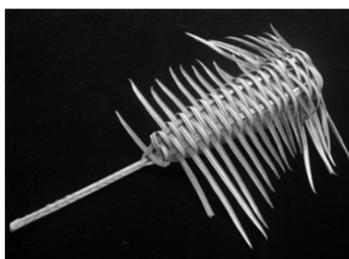
◇ 教育支援・地域連携事業

- ・ 「沖縄の草花玩具と藁算の作り方」ワークショップ in 国立科学博物館

平成 21 年 4 月 26 日（第 1 回 10:00～12:00、第 2 回 13:00～15:00）

平成 21 年 3 月 24 日から 5 月 17 日まで国立科学博物館で開催された企画展

「琉球の植物」の関連イベントとして「沖縄の草花玩具と藁算の作り方」ワークショップを実施します。



2009（平成 21）年度運営体制

各学部の代表者（教授）1 名からなる、琉球大学資料館（風樹館）運営委員会を設置し、以下の体制のもとに運営を行う。

- 館長（農学部教授兼任）：砂川 勝徳
- 学芸員（常勤）：佐々木 健志
- 事務補佐員（非常勤）：島袋 美由紀
- 学生ボランティア（随時）

- 運営委員：鈴木 正士（法文学部・准教授）、田吹 亮一（教育学部・教授）、長井 孝一（理学部・准教授）、土肥 直美（医学部・准教授）、平良 賢剛（工学部・准教授）、小倉 剛（農学部・准教授）

◇ 利用案内

開館時間：午前 10 時～午後 5 時

休館日：土・日・祝日・12 月 28 日～1 月 4 日

* その他、臨時に休館する場合があります。

入館料：無料

住所：沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地

Tel./Fax：098-895-8841

E-mail：fujukan@agr.u-ryukyu.ac.jp

URL：http://fujukan.lib.u-ryukyu.ac.jp

公共交通機関：

那覇バスターミナルから 97

番か 98 番で「琉球大学北口」

下車（所要時間約 1 時間）

那覇空港からは高速バスで「琉

球大学北口」下車（所要時

間 34 分）。

資料館（風樹館）まで徒歩 6

～10 分。

